

拙著『白村江の戦』史料摘要

拙著『白村江の戦』史料摘要

- (一) まへがき
- (二) 白村江の海戦・史料
- (三) 戦役関係海外金石文・史料
- (四) 文献史料 (①日本の部、②朝鮮三国Ⅱ新羅・高句麗・百済の部、③唐の部)
- (五) 日本・韓国主要遺蹟
- (六) 日本史の中の白村江海戦
- (七) 「白村江」の訓み方・補説
- (八) あとがき

夜 久 正 雄

(一) まへがき

白村江の戦は、狭義にとれば白村江の海戦である。西暦六六三年陰暦八月二十七、二十八両日にわたって、日本の百済救援軍と唐の新羅救援軍とが、白村江（錦江Ⅱ^{錦江} Kungang Ⅱ河口）で戦ったのである。日本水軍は大敗して撤退作戦にうつり、百済滅亡は決定的となり、やがて新羅と唐とは南北から高句麗を挟撃してこれを滅した（六六八年）。唐は高句麗征服の宿志を達成し、半島全土の征服にかかったが、新羅は抵抗し、やがて大同江以南（『白村江の戦』に鴨緑江以南とし

たのは問題）から唐軍を追ひはらってしまった。新羅の半島統一である。六七六、七年の頃といふ。ここで百済・高句麗・新羅の三国時代は終つて、朝鮮半島に統一国家が登場したのである。瀧川政次郎博士は最近の論文によつて、渤海国（七一三―九二六）の建国は高句麗遺民によるとの説を述べてをられる。（『皇學館論叢』第六卷第五号所載「鈴木治氏の『白村江』を読む」）白村江海戦の勝敗は北東アジア全域に大きな波動をよびおこしたのである。

日本の水軍と唐の水軍とが激突したこの海戦が、突発的な事件でないことはいふまでもない。そこに至る長い道のりがあったのである。海戦そのものも、日唐水軍の戦鬪ばかりではない。新羅王文武王はかう言つてゐる。（『三国史記』新羅本紀・遼東都護の唐將薛仁貴に対する文武王の返書）

「倭船千艘、停りて白沙に在り、百済の精騎岸上に船を守る。新羅の驍騎、漢の先鋒と為りて先づ岸陣を破

る」（原漢文）

「百済の精騎」は、百済王豊彰の率ゐる百済復興軍の精銳であつたにちがひない。八月十三日、百済王豊彰は、周留城で諸將にかう語つたといふ。（『日本書紀』天智天皇紀）

「今聞く、大日本国の救將盧原君臣、健児万余を率て、正に海を越えて至らむ。願はくは、諸の將軍等は預め図るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ」（原漢文）

と。これによると百済王は、百済復興軍の拠点であつた周留（州柔）城を出て、白村に向つたのである。錦江の北岸を陸路河口に向つたのであらう。周留を攻撃した新羅王の驍騎兵はすぐこれを追つて百済精騎を白江口の岸上に敗つたといふのである。文武王は、つづけて「周留失胆、遂に即ち降下す」（原漢文）と言つて、文を周留城の陥落につづけてゐて、白村江の海戦―日唐水軍の海戦について触れてゐないが、これは唐

将薛仁貴に対して新羅の功を強調したためであらう。しかしこの百濟精騎の壊滅が、渡海遠征の日本水軍にとって致命的な打撃となったことは想像できる。日本救援軍は敵前上陸の援護を喪ってしまったことになるからである。また、百濟王豊彰は、海戦の混乱にまぎれて船で高句麗に逃れた、と、『日本書紀』は記してゐる。

九月七日、唐・新羅連合軍に包囲された周留城が陥落して、百濟滅亡が決定的となり、前述の通り日本軍は、百濟官民をあはせて撤退作戦に入った。この海戦に参加した唐の將軍の中に、百濟の滅亡（六六〇年）に際して義慈王と共に唐に連行された王子の隆がある。父義慈王の死後、隆王子は唐朝に仕へて水軍の將として白村江に現はれたのである。錦江の航路と水戦に詳しかったのではあるまいか。百濟遺軍の統率者であった百濟王余豊（豊彰）と兄弟に当る。豊彰は若くして人質として日本に来てゐたので、二人の間にどれほど

の親しさがあつたかはわからないが、一方は百濟遺民を率ゐて日本と結び百濟復興を目ざす主將、一方は百濟を救援に來た日本水軍を迎撃する唐水軍の部將である。感懷尋常ならざるものがあつたであらう。豊彰が敗戦とともに高句麗に奔つたことも、あるいは同情に値するかも知れない。

以上、白村江の海戦を中心に多少その前後の事情を説明してみたのは、この戦鬪が単に二日間の間海戦にとどまらない、日本、唐、百濟・新羅・高句麗三国の織りなす七世紀東アジアの国際關係に甚大な影響を及ぼす海戦であつたことを暗示したからである。瀧川博士はこの前後を含めて「日唐戦争」と称してをられるが、傾聴すべき御意見である。ただ私は、主戦場が朝鮮半島にあつたことと、朝鮮三国の興亡が主軸であつたことにより、この戦鬪を広義に解釈した場合にも、なほ「白村江の戦」といふ呼称を用ひた。

ここにかかげる史料は、白村江の海戦をめぐる前後

の経緯を含めて、広義の「白村江の戦」——日本・百濟・高句麗連合対唐・新羅連合の、七世紀における戦役の史料である。

拙著『白村江の戦』（昭和四十九年一月、国民文化研究会刊）は、書物の性質上、史料出典を註記しなかつたため、研究上不便の点があるので、註を補ふ意味をも含めて本稿を作成したのである。

いまのところ私の用ひた史料は、すべて活字に印刷されてゐて、誰の目にも触れることのできるものであるから、いままさ「史料」などと銘打って発表するものもヨコがましいが、誰が何時どんな意図で書いたか、といふ点を問題にして取扱つてみると、思はない機微にふれることができる。史料といふ点では既に朝鮮史編集会編『朝鮮史』（朝鮮總督府昭和七年発行・昭和四十七年国書刊行会景印）といふ便利な書物があつて、日本、中国、朝鮮（新羅・高句麗・百濟）三国のこの戦役前後の史料を摘出してあるが、その原典に当る

となると、結構苦勞するので、なるべく原典について、典拠としての史料をあげてみたのである。何かの参考になれば幸である。

戦後の研究論文としては瀧川政次郎博士の「日唐戦争」（『皇学館論叢』第四卷第三号昭和四十六年六月）が最も広くかつ深い見地からしかも詳しく論じられてゐる。また海戦については村尾次郎博士の「白村江の戦」（『軍事史学』昭和四十六年）が詳しい。ただ周留城の位置その他の戦蹟調査についてはその後刊行された軽部慈恩博士遺著『百濟遺跡の研究』（昭和四十六年十月刊）の説に私はしたがふ。鈴木治教授の『白村江』（昭和四十七年十二月刊）はその謀略説に賛成できない点があるが、当時の国際関係を美術史の見地から論じたものである。

(二) 白村江の海戦・史料

「白村江」といふ名称は『日本書紀』に出てくる。

天智天皇二年八月の記事である。日本側から海戦の様を記した唯一の記事でもある。

「秋八月の壬午の朔甲午。新羅、百済王の己が良將を斬れるを以て、直に国に入りて先づ州柔を取らむことを議れり。是に、百済、賊の計る所を知りて、諸將に謂りて曰はく、『今聞く、大日本国の救將、盧原君臣、健兒万余を率て、正に海を越えて至らむ。願はくは、諸の將軍等は、預め凶るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ』といふ。戊戌に、賊將、州柔に至りて、其の王城を繞む。大唐の軍將、戦船二百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。日本不利けて退く。大唐陣を堅めて守る己酉に、日本の諸將と、百済の王と、氣象を覩ずして相謂りて曰はく、『我等先を争はば、彼自づからに退くべし』といふ。更に日本の伍乱れたる中軍の卒を率て、進みて大唐の陣を堅くせる軍を打つ。大唐、便ち左右より船を夾みて繞み戦ふ。

須臾之際に、官軍敗績れぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者衆し。鱸舳廻旋すること得ず。朴市田来津、天に仰ぎて誓ひ、齒を切りて嘔り数十人を殺しつ。焉に戦死せぬ。是の時に、百済の王豊彰、数人と船に乗りて、高麗に逃げ去りぬ。

九月の辛亥の朔丁巳に、百済の州柔城、始めて唐に降ひぬ。是の時に、国人相謂りて曰はく、『州柔降ひぬ。事奈何といふこと無し。百済の名、今日に絶えぬ。丘墓の所、豈能く復往かむや。但豆礼城に往きて、日本の軍將に会ひて、事機の要とする所を相謀るべからくのみ』といふ。遂に本より枕服岐城に在る妻子等に教へて、国を去る心を知らしむ。辛酉に、牟豆に発途つ。癸亥に、豆礼に至る。甲戌に、日本の船師、及び佐平余自信・達率木素貴子・谷那首首・憶礼福留、并せて国民等、豆礼城に至る。明日、船発ちて始めて日本に向ふ」(岩波書店刊日本古典文学大系『日本書紀下』第二刷三五八一—三六〇頁。ふり仮名省略、当用漢字使

用) 秋八月壬午朔甲午。新羅、以百濟王斬己良將、謀直入國先取州柔。於是、百濟知賊所計、謂諸將曰、今聞、大日本國之救將盧原君臣、率健兒万余、正当越海而至。願諸將軍等、必預圖之。我欲自往待饗白村。○戊戌、賊將至於州柔、繞其王城。大唐軍將、率戰船一百七十艘、陣烈於白村江。○戊申、日本船師初至者、与大唐船師合戰。日本不利而退。大唐堅陣而守。○己酉、日本諸將、与百濟王、不觀氣象、而相謂之曰、我等爭先、彼必自退。更率日本乱伍中軍之卒、進打大唐堅陣之軍。大唐便自左右來船繞戰。須臾之際、官軍敗績(續)朝日新聞刊六國史本)。赴水溺死者衆。鱸鮑不得廻旋。朴市田來津、仰天而誓、切齒而噴、殺數十人。於焉戰死。是時、百濟王豐彰、与数人乘船、逃去高麗。○九月辛亥丁巳、百濟州柔城、始降於唐。是時國人相謂之曰、州柔降矣。事无奈何。百濟之名、絶于今日。丘墓之所、豈能復往。但可往於弓礼城、会日本軍將等、相謀事機所要。遂教本在枕服岐城之妻子等、

令知去國之心。○辛酉、発途於牟豆。○癸亥、至弓礼。○甲戌、日本船師、及佐平余自信・達率木素貴子・谷那晉首・憶礼福留・并国民等、至於弓礼城。明日、発船始向日本。(同前書、三五九頁・三六一頁。当用漢字使用、返り点省略)

『日本書紀』ならびに日本古典文学大系本の註解に拠ると、海戦前後の様子は次の通りになる。

秋八月十三日(甲午)百濟王豐彰、諸將に謂る。云々。

十七日(戊戌)州柔の王城、繞まる。

大唐の軍將、戰船百七十艘を率て、

白村江に陣烈。

二十七日(戊申)日本船師の初づ至る者と大唐の

船師と合戰。日本不利退く。大唐陣を堅め

て守る。

二十八日(己酉)中軍敗績。朴市田來津戰死。百

濟王、船に乗りて高麗に逃ぐ。

九月七日(丁巳)州柔城降伏。國人相謂りて國を

去る心を知らしむ。

十一日（辛酉）牟豆に発途。

十三日（癸亥）豆礼に至る。

二十四日（甲戌）日本の船師及び佐平余自信ら豆

礼城に至る。

二十五日 日本に向ふ

『三国史記』の「新羅本紀」「百濟本紀」ともに月

日を伝へない。ただ「列伝」の「金庾信・中」に「龍

朔三年癸亥。百濟諸城潛図興復。其渠帥抛豆率城。乞

師於倭為援助。大王（文武王）親率庾信、仁問、天存、

竹旨等將軍。以七月十七日征討。次熊津州。与鎮守劉

仁願合兵。八月十三日。至千豆率城。百濟人与倭人出

陣。我軍力戰大敗之。百濟与倭人皆降。大王謂倭人曰。

惟我与爾国隔海分疆。未嘗交構。但結好講和。聘問交

通。何故今日与百濟同患。以謀我國。今爾軍卒在我掌

握之中。不忍殺之。爾其帰告爾王。任其所之。」

（『三国史記』卷第四十二、列伝第二（「金庾信中」）国

書刊行会発行昭和十六年一月二十日第三版、昭和四十六年

七月七日（景印）発行、四三五・六頁）

文中の「豆率城」は軽部博士の説に拠ると「周留城」

である。八月十三日は『日本書紀』では豊彰王が周留

城で軍議を行なひ日本軍を迎へるために周留城を出て、

「白村」に向つた月日であるが、「金庾信伝」では、

周留城攻撃の月日となつてゐる。

「新羅本紀」には「白村江の海戦」のことは書いて

ない。この「金庾信伝」も同じで、豆率城（周留城）攻

撃のことだけである。このことは新羅が陸から援護し

て海戦の勝因を作つたことを述べるためにしたこと

であらうと思ふが、同時に、新羅が直接海戦に参加しな

かつたことをも語つてゐるのだと思ふ。海戦は、日本

水軍と唐の水軍との間に行なはれたのである。

『三国史記』が『旧唐書』『唐書』『冊府元龜』

『資治通鑑』を引用してゐることは朝鮮史編修会編

『朝鮮史』（朝鮮總督府昭和七年発行・昭和四十七年

国書刊行会発行)『朝鮮史料』に詳しい。そこで『日本書紀』以外に海戦の史料を求めると、『旧唐書』その他の唐の歴史文献が最も重要なものとなるのである。それは次の通りである。

(俄而余豊襲殺又遣使往高麗及倭国請兵以拒官軍詔右威衛將軍孫仁師率兵浮海以為之援)

仁師既与仁軌等相合。兵士大振。於是諸将会議。或曰。加林城水陸之衝。請先擊之。仁軌曰。加林險固。急攻則傷損戰士。固守則用日持久。不如先攻周留城。周留賊之巢穴。群兇所聚。除惡務本。須拔其源。若剋周留。則諸城自下。於是仁師・仁願及新羅王金法敏。帥陸軍以進。仁軌乃別率杜爽・扶余隆。率水軍及糧船。自熊津江往白江。会陸軍。同趨周留城。仁軌遇倭兵於白江之口。四戰捷。焚其舟四百艘。煙焰漲天。海水皆赤。賊衆大潰。余豊脱身而走。獲其宝劍。偽王子扶余忠勝・忠士等率士女及倭衆并耽羅国使一時竝降。百濟諸城皆復歸順。(以下略)(『朝鮮史・第一編第三卷』中国史

史料五一九頁。『旧唐書』卷八十四・列伝第三十四、劉仁軌——『二十五史23旧唐書二』—芸文印書館印行—一三六三頁)孫仁師中路迎擊破之。遂与仁願之衆相合。兵勢大振。於是仁師・仁願及新羅王金法敏帥陸軍進。劉仁軌及別帥社(杜の誤?)爽・扶余隆率水軍及糧船。自熊津江往白江。以会陸軍。同趨周留城。仁軌遇扶余豊之衆於白江之口。四戰皆捷。焚其舟四百艘。賊衆大潰。扶余豊脱身而走。偽王子扶余忠勝・忠士等。率士女及倭衆竝降。百濟諸城皆復歸順。(同前『中国史料』五二一頁、『旧唐書』『東夷伝』——『二十五史』24『旧唐書』卷一百九十九上「東夷伝、百濟」二六六九頁)『唐書』は『旧唐書』とほとんど変りなく、『旧唐書』に拠つたものと思ふ。『資治通鑑』も「唐紀十七高宗中之上」にほとんど『旧唐書』に拠つてゐる。ただ「九月戊午。熊津道行軍總管右威衛將軍孫仁師等破百濟余衆及倭兵於白江。拔其周留城」とある。「九月戊午」は「拔其周留城」にかかると思はれるので、「九月戊午」すな

はち「九月八日」とすれば、『日本書紀』の「九月丁巳（七日）」と一日の違いである。

『資治通鑑』がこの「戊午」を何に拠ったか知らないが、『日本書紀』と一日違ひにすぎないことは、事実がその兩日のどちらかのことだったのだらうと思ふ。

ただ、『三国史記』の「新羅本紀」にある新羅文武王の薛仁貴寄書（文武王十一年秋七月二十六日）に対する報書の中に、次の一節がある。

至龍朔三年。摠管孫仁師領兵來救府城。新羅兵馬。亦發同征。行至周留城下。此時倭国船兵來助百濟。

倭船千艘。停在白沙。百濟精騎。岸上守船。新羅驍騎。為漢前鋒。先破岸陣。周留失胆。遂即降下。南方已定。廻軍北伐。任存一城。執迷不降。云々。

（『三国史記』新羅本紀第七文武王下）—国書刊行会本『三国史記』七九頁）

白村江の海戦は文武王三年のことで、この一節はそれから九年ほど経て文武王の書いたものである。殊に唐

將薛仁貴の詰問状に対する返事であるから、白村江の海戦には直接ふれないのは当然だが、「倭船千艘。停在白沙。百濟精騎。岸上守船。新羅驍騎。為漢前鋒。

先破岸陣。周留失胆。遂即降下」とあるのは、全くの作り話とも思へない。『日本書紀』に拠ると、日本の水軍が救援に来るのを迎へるために、豊彰王が「我欲自往待饗白村。」と言ったとある。つまり豊彰王は日本軍を「白村」に迎へるために城を出たらしい。その

「白村」が「文武王報書」の「白沙」であるとすれば、この二つの文書はともに成立することになる。文献学の上で「文武王報書」がどの程度信頼できるのかよくわからないが、私は本物だといふ感じがする。『三国史記』の著者金富軾の作文にしてもできすぎてゐるのではないかと思ふからである。もし金富軾が『日本書紀』を見て（これはありさうもないが）この「白村」に「白沙」（白沙里・白沙場）をあてて、この文武王の報書を作文したとするなら、逆に、白村即ち白沙と

いふ考へが成り立ってしまふ。そこで、いまは、金富
軾が『日本書紀』とは無関係に文武王返書を引用した
とするが、さうすると「白沙」に倭船が停泊すること
も考へられる。「待ち饗へむ」は、食糧や水を補給し
ようとしたのではなからうか。あるいは、上陸して直
ちに陸路周留城に向はうとしたのではなからうか。百
濟の豊彰が日本救援軍の上陸を援護するために錦江河
口の白沙里に向つたといふことはありうるし、それを
新羅の文武王が追撃して撃破したことも充分ありうる
ことなのである。「倭船千艘」の「千艘」は勿論誇張
である。時に、唐の水軍は熊津にあつたのである。白
沙里で上陸できなくなった日本水軍は、白江口から白
江に入つて、周留城下に迫らうとした、そこに上流の
熊津から下流の白江に来て、周留城を攻撃しようとし
てゐる唐・新羅連合軍があり、その水軍（劉仁軌・杜
爽・扶余隆の率ゐるもの）が、周留城の南の白江の河
口で遭遇戦となつた、とすれば、『日本書紀』『旧唐

書』『三国史記』等の文献に矛盾が少くなるのである。
そのためには周留城（『旧唐書』）すなはち州柔（『日
本書紀』）すなはち豆率城（『三国史記』）として、
周留城の位置が、白江の下流沿岸にあり、しかも河口
に近くなければならないのである。つまり、白江、白
村江が錦江下流であることは当然のこととして、周留
城の位置が、白村江海戦のキイ・ポイントになるので
ある。

軽部慈思氏はその遺著『百濟遺跡の研究』（昭和四
十六年十月十六日、吉川弘文館発行）において『日本
書紀』の「白村江」が、『三国史記』『三国遺事』
『旧唐書』『唐書』の「白江」であることを詳しく論
じられた。（同書「白江考」）また『日本書紀』の「州
柔」が同じく『三国史記』『旧唐書』の「周留城」で
忠清南道扶余郡忠化面周峰山城であることを論断され
た。（同書「周留城考」）

これは著者が「本書は著者が過去において十九カ年

の間、百済の故郷忠清南道公州をはじめ、扶余の附近に居住して百済の遺跡・遺物の検出に努め、また一方は百済関係の史料を検討して現地の踏査を行ない、従来多くの学説の誤りあるものを指摘してこれを糺し、これらについての論攷を纏めあげて一冊としたものである。」と書かれてある通り、文献史料と考古学的資料とを照合したもので、拙著『白村江の戦』の「白村江の海戦」は、一にこの軽部氏の歴史地理的研究に拠ったのである。

なほ李弘植博士の『国史大事典』（一九七四、一、一〇）には次の通りであって軽部説に近い。

「周留城

忠清南道韓山地方にあった百済の城。支羅城ともいう。百済が滅亡してから福信・道琛などが復興運動をした根拠地で、六六一年（新羅文武王一年）羅・唐連合軍の攻撃を撃退して一時は有利な勢であったが、復興軍の内部に分裂が起こり福信は道琛を殺し、また王

子の豊は福信を斬るなどの勢力の弱化に乗じて、孫仁師の指揮する唐軍と文武王の率いる新羅軍が水陸両面の攻撃を加えたので、六六三年城は陥落し、豊は高句麗に亡命して復興運動も失敗に帰した。周留城の位置に関しては色々の説があるが錦江下流の韓山村であるとの説が有力である。」（斐徳煥教授日本語訳）

(三) 戦役関係海外金石文・史料

○ 「大唐平百済国碑銘」（六六〇年）

いはゆる「百済塔」の才一層に刻印した碑銘で、「顕慶五年歲在庚申八月己巳朔十五日癸未建 洛州河南權懷素書」と刻印してある。いまも扶余郊外の定林寺趾に立ってゐる。この年月日は六六〇年陰曆八月十五日のことである。『朝鮮金石総覧』に「九・扶余唐平百済碑」として全文が出てゐる。主として蘇定方はじめ百済討伐軍の紀功文であるが、欠字も少く、貴重な史料である。また『金石萃編』（国風出版社印行）には、

編者王昶の解説を加へて説明がある。

『金石萃編』卷五十三・唐十三（『金石萃編』②九

一三一九一七頁）

『朝鮮金石總覽・上』「扶余・唐平百濟碑」（同書

一三一七頁）

『朝鮮金石總覽・下』「朝鮮金石總覽補遺」

一 扶餘東南里王層石塔楣石刻字（同書一頁）

二 扶餘石槽刻文（同二、三頁）

○ 『唐劉仁願紀功碑』（六六三—六六五）

百濟滅亡後、泗泚城（扶余）の留鎮となつた郎將劉

仁願の紀功碑である。扶蘇山上に建てられたが近年、

扶余の博物館前庭に移された。これも『朝鮮金石總覽』

に全文（ただし欠字が多い）が掲載されてゐる。その

文章を見ると、劉仁願の若い時代からの功績を讃へた

うへ、百濟滅亡後、「都護と為り兼ねて留鎮を知り云

々」とあり、「偽僧道琛偽扞率鬼室福信」が反逆し、

苦戦に陥つた様子が書かれてあつて、そのあとが欠字

になつてゐる。年時について、同書によると「推定新

羅文武王三年癸亥」とある。「文武王三年」は白村江

の海戦のあつた六六三年の翌年である。後半が全部欠

字になつてゐるので推定の根拠がわからないが、鎮將

劉仁願はこの年はじめて危機を脱し、留鎮の使命を果

したことになるので、これでもよい。同年には日本に

使者郭務倞らを派遣し（『日本書紀』天智天皇紀三年）

文書函と献物を貢上した。また翌文武王四年には、熊

津に新羅・百濟を会盟させてゐる。さらに翌年（六六

五年）、唐皇帝の勅により有名な就利山の会盟を行な

つて凱旋したのである。後、唐の高句麗征討の時期

（六六八年）に遅れて姚州に流された（『旧唐書』「高

句麗伝」）とあるから、劉仁願紀功碑の建立は、『朝

鮮金石總覽』にある推定年次六六三年から六六五年と

みてよいであらう。後半の欠字の箇所が読めないのが

残念だが、一等史料に變りはない。（『朝鮮金石總覽

・上』一七一—二二頁扶余・唐劉仁願紀功碑）

○ 扶余隆墓誌

扶余隆は百濟滅亡の時の義慈王の王子である。義慈王とともに捕へられて唐の都洛陽に連行された。そこで釈されて司稼卿を授けられたが、義慈王の死に遭った。白村江の海戦では水軍の將として現はれ、戦後、熊津の都督となり、新羅文武王と会盟する等、唐の百濟故地経営の手先となったが、結局新羅をおそれ、唐の京師長安に帰ってしまった。近年になって、洛陽で墓誌が発見された。「春秋六十有八薨于私第贈以輔国大將軍」と墓誌にある。

【朝鮮金石總覽・下】「朝鮮金石總攬補遺」(一)新羅期
（『朝鮮金石總覽補遺』五、六頁）

○ 金仁問墓碑

昭和六年十二月、慶州の西岳において有光教一氏発見。

（『青丘学叢』第二卷第七号「慶州金仁問墓碑の発見」

（一五七—一九頁）所載）

○ 泉男生墓誌

「一九二三年男産の墓誌とともに中国洛陽南方で発

見された縦二尺一寸横二尺九寸の誌石である。ここには男生の官職品階と彼の祖先と父蓋蘇文に関する事蹟が記録してあつて重要な史料となつてゐる。文献『朝鮮金石攷』」（李弘植博士編『国史大事典』一九七四年一月十日刊、右の説明文は斐徳煥教授日本語訳）

○ 李勣碑

『金石萃編』卷五十九・唐十九（『金石萃編』②—四〇—一〇四七頁）唐の高宗の御製御筆といふ。

○ 晉祠銘

唐の太宗の御製御筆といふ。

『金石萃編』卷四十六・唐六（『金石萃編』②八一—七—八二頁）

○ 房玄齡碑

『金石萃編』卷五十・唐十（『金石萃編』②八六七—八八九頁）

(四) 文献史料

文献史料は日本側の『日本書紀』（七二〇年）朝鮮側（新羅側）の『三国史記』中国側の『旧唐書』がそれぞれ根本史料であるが、その他にも参照すべきものが多い。それぞれ大著でとても全部を読破することはできないが、私が史料として一部分目を通したものを列挙してみる。

白村江の戦役を中心として日本・朝鮮・中国の關係を見るためには、どうしてもこの三国の史料に当らなければならぬ。それがこの戦役に関する史料の特色であらう。

例へば新羅の太宗武烈王は即位前、金春秋として活躍したことが『三国史記』に詳しく『旧唐書』にも記されてゐるが、彼が日本に來たことは中国・朝鮮の文献には書いてない。『日本書紀』の記事は充分信頼できるから、金春秋の足跡を考へるためには『日本書紀』を欠くことができないのである。

また百済の滅亡の際、百済占領軍司令官となつた劉仁願といふ人物がある。『旧唐書』の「百済伝」「高句麗伝」にその事績が見える。また「劉仁願紀功碑」が扶余に残つてゐるのでそれを確認することもできるが、白村江戦役後、日本と折衝した経緯は『日本書紀』に詳しい。平凡社の『アジア歴史事典』（一九五九年——一九六二年、全十巻）は実に便利なもので私はいつも恩恵を受けてゐるが、劉仁願の項の史料の中には、『日本書紀』はあがつてない。

『日本書紀』（七二〇年）は『旧唐書』（九四五年）や『三国史記』（一一四五年）よりもはるかに古く、その中には当時の記録ともいふべき「百済記」とか「日本世記」とか「伊吉博徳書」とかいふものまで含んでゐるのであるから、東洋史の見地からも重要文献とみるべきであらう。もっとも日本の文献や金石文は見やすいので簡単に記し、『三国史記』『旧唐書』等朝鮮・中国の史料については多少解説を加へた。研究

論文の中に見て原典に当たってみたいと思ひながらまだ当ることのできないものは省略した。その中には専門家にとっては造作ないと思はれる次のやうなものがあ
るが、私には未見でまだ使ふことができない。

閻立本筆『歴代帝王図巻』「十八学士及び凌烟閣功臣の図」

『梁職貢図』

かうした意味でも本稿はさらに補正せらるべきである
こと言ふまでもない。

①日本の部

○『日本書紀』（七二〇年）

直接的には斉明天皇紀・天智天皇紀であるが、その前後、推古天皇紀から持統天皇紀まではどうしても読まなければならぬ。さらに遡れば、継体天皇紀以後の日韓関係史、さらに遡って神功皇后・応神天皇のところから読まなければならぬ。岩波の日本古典文学大系本『日本書紀』（坂本太郎・家永三郎・井上光貞

・大野晋校註・昭和四〇年七月五日第一刷）は海外史料を参照した詳細な註があり、「三韓略図」が付せられてあって、思慮を蒙るところ多く私はほとんどこの書物の註に拠った。

○『古事記』（七一二年）

特に漢文で書かれた『三國史記』との比較において。

○『万葉集』（七七七年頃成立か）

齊明天皇・天智天皇・額田女王をはじめ登場人物の歌、遣唐使関係者の歌、瀬戸内海航路の歌、防人の歌等、当時の人々の懐ひを知るために欠くことのできない史料である。

○『大織冠伝』（『家伝・上』）（藤原仲麻呂、七六〇

—七六二か）

藤原鎌足の伝記

○『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』『法華義疏』（六一五年頃か）聖徳太子著

○『上宮聖徳法王帝説』（成立年時不詳）

聖徳太子伝（天寿国曼荼羅銘文等を含む）

○『続日本紀』（七九四年）

『日本書紀』につづく文武天皇元年から桓武天皇延暦十年までの正史。

○『日本国現報善悪霊異記』（八二二年）

大伴部博麻など白村江の戦役で捕虜になって帰国した人の記事は、『日本書紀』『続日本紀』に出てゐるが、『日本霊異記』にもあるのを最近見て驚いた。

（朝鮮總督府刊朝鮮史編集会編『日本史料』）「巻上 遭兵灾信敬觀世音并得現報縁第十七」

○『風土記』（七一六—七四〇頃）

②朝鮮三国（新羅・高句麗・百濟）の部

○『三国史記』（一一四五年）

高麗王朝の学者政治家金富軾の著。金富軾は慶州の人で、そのためか新羅を主として書いてゐる。

「新羅本紀」「高句麗本紀」「百濟本紀」「列伝」に分かれてゐる。中国の史料である『旧唐書』『唐書』

『資治通鑑』から引用したところが多いからであるから、その点を考へて読まなければならないが、『新羅本紀』には重要な記述が多い。特に文武王十一年の

「薛仁貴寄書」と「文武王返書」とは、当時のものとすれば、最も重要な史料である。また文武王が「群臣に遺言して、東海の口の大石の上に葬った」（原漢文）とあつた記事は、薨去（六八一年）後、約千三百年、昭和四十二年五月慶州北道月城郡の海岸に海底陵が発見されたので、真実が立証された。遺詔も当時のままを伝へたのではあるまいか。

「列伝」の中から関係する人物の伝をあげておく。

金庚信伝

『三国史記』卷第四十一・列伝才一・金庚信上、卷

第四十二・列伝才二・金庚信中、卷第四十三・列伝

第三・金庚信下。（前掲国書刊行会『三国史記』四

二五—四四一頁）

金仁問伝

『三国史記』卷第四十四。列伝第四（金仁問）（『三国史記』四四五―四四七頁）

黒齒常之伝

『三国史記』卷第四十四・列伝第四（黒齒常之）（『三国史記』四四九―四五〇頁）

強首伝

『三国史記』卷四十六・列伝第六（強首）（『三国史記』四六三―四六四頁）

階伯伝

『三国史記』卷四十七・列伝第七（階伯）（『三国史記』四七七頁）

蓋蘇文伝

『三国史記』卷第四十九・列伝第九（蓋蘇文）（『三国史記』四八七、八頁）

○『三国遺事』（一二七五―一八九年）

釈一然撰。『三国史記』に洩れた事項を集録したといふ。一然七十歳以降の著といふので拙著『白村江の

戦』に（一二〇六一八九）と書いたのを右のやうに訂正（斐徳煥教授の御指摘による）。

「紀異卷第一」の「真徳王」「金庾信」「太宗春秋公」「卷才二」の「文虎王法敏」「南扶余」等関連記事が多い。

（朝鮮史学会編輯兼発行昭和三年九月、昭和四十六年七月、国書刊行会景印発行）

『新增東国輿地勝覧』（一五三二年）

百濟滅亡に際し官女千人が白馬江に投じて死んだといふ落花岩の伝説は本書にある。（李弘植博士編『国史大事典』一九七四年一月十日刊に拠る）

③唐の部

○『旧唐書』（九四五年）

後晉の劉昫等の奉勅撰。中国二十四史の一つで、本紀・列伝ともに関係叙述が多いので重要箇所を次に列記する。（芸文印書館印行・二十五史24『旧唐書』一、二、三）

本紀第二、太宗上 本紀第三、太宗下

本紀第四、高宗上 本紀第五 高宗下

本紀第六 則天皇后

列伝第十六 房玄齡 列伝才十七 李靖・李勣

列伝第二十一 魏徵 列伝第三十 褚遂良 列伝第

三十三 蘇定方・薛仁貴 列伝第三十四 劉仁軌

列伝第五十九 契苾何力 黒鹵常之 列伝第一百四

十九上 東夷（高麗・百濟・新羅・倭国・日本）

○『唐書』（一〇六〇年）

宋の歐陽修等の奉勅撰。『旧唐書』を改修したもの。

『旧唐書』に準ずる。

○『資治通鑑』（一〇八四年）

宋の司馬光の奉勅撰。編年体史書であるから、中の

『唐紀』は、『旧唐書』『唐書』の本紀列伝を参照し

て書かれてゐる。

○『隋書』（六三六年）

『隋書』は唐の魏徵が太宗の勅を奉じて撰したもの

で、唐の貞観十年（六三六年）成る。撰者の魏徵は、

唐の太宗の信任の最もあつた名臣である。政治家、

歴史家、詩人であつたので、広義の学者であつた。唐

初の名臣名將と言はれる人物はみなさういふ性格であ

つたが、魏徵は中でも特に優れてゐて、貞観以前、草創

の名臣を房玄齡とし貞観以後守成の名臣を魏徵とする

とは、太宗皇帝の名評（『旧唐書』列伝「魏徵」）で

ある。太宗の高句麗親征に反対したが、遂に李勣將軍

に押し切られた。もつとも、太宗の親征のはじまつた

のは魏徵の死後であつた。『隋書』の「紀・伝」は各

巻のはじめに「唐特進臣魏徵上」と記されてゐる。魏

徵の力の入れやうがわかる。『隋書』は、隋の歴史事

実を記したもののだが、同時に魏徵の東方政策をも見る

ことができる。殊にその「東夷伝」（倭国伝を含む）

は重要である。

○『文館詞林』（六五八年）

唐の高宗の勅命により許敬宗らが編集。漢から唐に

する詩文を集めたもの。中に太宗の「貞観年中・百済王義慈を撫で慰める詔一首」「貞観年中、新羅王を撫で慰める詔一首」がある。この詔は内容から言って、貞観十九年（六四五年）二月初旬のことと思はれる。まず原文通りであると見て間違ひないと思ふ。

○「薛仁貴征遼事略」（永樂大典卷之五千二百四十四、十三爾、遼）——『永樂大典・第三十五冊』（中華民國五十一年二月初版・世界書局出版）・九丁裏——四十五丁表）

○「薛仁貴征遼事略」（趙万理編註）（古典文学出版社一九五七・上海——一九七二年八月宋華書林発行）

(五) 日本・韓国主要遺蹟

戦役関係の舞台は日本、朝鮮三国、中国の広範囲にわたるが、私が今までに訪ねることのできたのは日本国内と韓国の慶州附近及び公州・扶余附近のみである。隋唐および高句麗の遺蹟はこの戦役の遺蹟としては全

体の半分をなすものであるが、私には訪ねることができないので、主として戦前の文献・写真に拠った。したがって本稿にはすべて省略した。

(一) 日本の部

(1) 日本軍の進路の順にあげる

○齊明天皇・飛鳥板蓋宮跡（奈良県高市郡明日香村）
後飛鳥岡本宮跡（同上、明日香村雷・奥山あたりといふ）

○難波宮跡（山根徳太郎氏の発掘による大阪城南方、大阪市東区法円坂町の宮殿遺蹟）

○四天王寺（大阪市天王寺区）

○住吉神社（大阪市住吉町）

○難波津（大阪市北区北浜・難波橋付近）

○瀬戸内海航路（明石の門、印南野、播磨灘、大伯海、大三島、熟田津、下関）

○熟田津（松山市外港三津浜または高浜）

○那大津（福岡市博多港）○宗像大社（福岡市外）

○志賀島・志賀海神社○香椎神宮（香椎廟趾）○住吉神社（福岡市）

○齊明天皇行宮・朝倉橋広庭宮趾（福岡県朝倉郡）

○惠蘇八幡宮裏山古墳（齊明天皇御陵伝承地）（同右）

○大伴部博麻呂碑 文久三年建立、福岡県八女郡上陽

町北川内公園。（鶴久二郎氏編『大伴部博麻』——四

八年一月一日発行——に拠る）

○大伴部博麻之碑 明治二十五年建立、久留米市篠山

神社境内。（同前書に拠る）

○久米神社 聖徳太子の弟君で撃新羅將軍として出征

途上筑紫で薨ぜられた久米皇子をまつるといふ、未だ

参詣してゐない。糸島半島に在る。

○日本軍は玄海灘航海を経て、一旦釜山附近に上陸し、

一部は半島の南西海岸沿ひに錦江河口にむかったので

あらう。戦後の撤退行路はまだよくわからない。

(2)戦後の防衛施設その他

○博多港能古島矢良崎 防人の屯所があったらしい。

対馬国、対馬島、壱岐島に防人と烽を置いた。烽のあとは不明である。防人が同時に烽の役をもしたのであらう。

○水城（福岡県太宰府町）

○鬼室神社 滋賀県日野町小野、鬼室集斯（百済復興

軍の主将で豊彰に殺された福信の子）をまつるといふ。

百済亡命者の集落だったのであらう。福信をもあはせ

まつつたと思ふが、私はまだ行ったことがない。

○大野の城、椽の城 太宰府近郊百济式築城趾。

○高麗神社及び高麗山勝樂寺聖天院 高句麗の若光を

祭る。天智天皇五年の記事にその名が見える。（埼玉

県高麗郡）

○近江大津宮（大津市）

○高安城（大阪府生駒市）

○屋嶋城（高松市屋島）

○金田城（長崎県対馬、巖原市の北方）（私は未調査）

○太宰府趾（福岡県太宰府町）

○観世音寺 天智天皇が斉明天皇追福のため創建されたと伝へる。(福岡県太宰府町)

○熱田神宮 草薙の剣を新羅僧が盗み出したことがある。(名古屋市熱田区)

○天武天皇・持統天皇大内山陵(奈良県高市郡明日香)

○その他・法隆寺、藤原宮趾、応神天皇陵、仁徳天皇陵、高松塚古墳等

(二)、韓国の部

○武烈王陵(慶州) ○武烈王碑扶亀・篆額(同所) ○

金庚信墓(慶州) ○文武王海底陵(最近の発見にかかると、私は未見)その他新羅王陵等

○扶余王宮趾○落花岩○百済塔(定林寺趾) ○三忠祠

(義直・成忠・興首)等○熊津(公州) ○武寧王陵、就利山○扶蘇山、周留城趾、任存城趾○白沙里○白江

口等○益山郡弥勒寺石塔、円光大学発掘中。軽部慈恩氏の『百済遺跡の研究』に詳しい。

(なほ『白村江の戦』掲載の金庚信銅像(慶州)と

楷陌銅像(扶余)とは写真をとりちがへたので、訂正させていただきます。)

○五万分一地図・韓国発行該当地域——公州・咸悅・裡里・扶余・群山・大川・青陽・論山・舒川・藍浦・江景・参礼(一九七〇——一九七四)等

(六) 日本史の中の白村江海戦

白村江の海戦(六六三)が日本・朝鮮・唐三国の明暗を分つ歴史的な戦闘であったことは、三国それぞれの歴史家の認めるところで、『日本書紀』(七二〇)はじめ『旧唐書』(九四五)『唐書』(二〇六〇)『資治通鑑』(一〇八四)『三国史記』(一一四五)『三国遺事』(一二七五—八九)等に叙述されてゐる。

『日本書紀』がこの戦役を叙述したのは当然のこと、約六十年前の大戦争の記憶が薄れるわけではない。書紀撰進の総裁であられた舍人親王は、天武天皇の皇子で六七七年のお生れである。白村江の海戦はお生れになる前の出来ごとであるが、父天皇は大海人皇子と

して従軍されたにちがひないので、一世代前の大事件である。言ってみれば、昭和三十四年生れの人が四十三才頃になって大東亜戦争を書くといふことである。追想の消滅するはずもないし、大事件の認識が薄れるはずもあるまい。「日本書紀」の撰者がこの海戦を書いたのはこんな時代感覚だったのである。

ところが、以後の日本歴史の書物の中には不思議にこの海戦についての叙述が少い。菅原道真の『類聚国史』（八九二年成立）は欠巻があるといふから正確なことはわからないが、「巻七十八・賞宴部下・賞賜」といふ部門に、持統天皇の詔をあげて大伴部博麻表彰の記事を記すにとどまる。「賞賜」の例としてあげたものであって、海戦そのものを取りあげたものでも博麻の精神を直接に賞揚したものでもない。

戦役関係の捕虜たちの帰還記事は『日本書紀』はじめ『続日本紀』（七九七年菅野真道ら撰進）『日本霊異記』（僧景戒撰八一〇―八二四成立）に散見する。

七〇〇年代にはさういふことが続いたのであらう。敗戦の余波を記した人々の胸裡に敗戦の回想があったことは言ふまでもないが、敗戦そのものを叙述したものではない。

藤原鎌足の伝記である「大織冠伝」（『家伝』上巻、七六〇―七六四？）には、天智天皇が側近の鎌足を唐の魏徴、新羅の金庚信、高句麗の蓋蘇文、百済の善仲（浄忠、成忠か？）と較べた話が伝へられてゐる。当時国際的に有名だったアジア各国の名臣を比較されたわけで、当時の日本の国際感覚を記録してゐるが、『大鏡』（白河院政期頃成る、一〇八六―一二九）の鎌足伝にはもう戦役の記述はない。『水鏡』（嘉応・建久間、一一六九―一九八）には、「斉明天皇」「天智天皇」の紀を記述するが、戦役にはふれてゐない。『愚管抄』（慈円、一二二〇）も同様である。『神皇正統記』（一三三九）は『日本書紀』に拠って古代史を略述するが、日中関係に配慮して叙述してゐるに

かはらず、斉明天皇の西征にふれながら、海戦にはふれてゐない。日本最初の外交史とも言ふべき『善隣国宝記』（一四七〇）は、『海外国記』の記事を引用して戦役後の郭務悰の来朝を詳細に叙述しながら、その前年の戦役には全くふれてゐない。

そこで、白村江の敗戦の叙述が国史に再現するのは徳川光圀（一七〇〇歿）の『大日本史』（一七二〇）、水戸家が幕府に献納）を待たねばならないのである。

『大日本史』は戦役の歴史を『日本書紀』に拠って「天智天皇紀」の記事の中に叙し、大伴部博麻の伝を同じく書紀に拠って「義烈伝」の調伊企儼の項目に記した。

日本の通史としては当然の取り扱ひといふべきであるが、光圀の識見をうかがふことができる。

本居宣長は「馭戎慨言」（からをさめうれたみこと）（寛政八年＝一七九六刊）といふ日本の国際関係史を書いたが、その中に「み軍え勝たて」百済が亡んだと一言しか記してゐないのはさびしい。

鶴久二郎氏編『大伴部博麻』（昭和四十八年十二月一日刊）所載の『稿本八女郡史忠節伝』に、文久三年（一八六三）大伴部博麻の郷里と思はれる現福岡県八女郡上陽町、北川内村の室園神社境内地に久留米藩の八野一貞たちが「大伴部博麻呂」（『類聚国史』に拠る名）の碑を建てたことは、幕末尊皇攘夷の機運にうながされての快挙であった。（文久三年は或る人の説に「文久二年」、室園神社は「伊勢神社」といふ）。碑の裏面に『大日本史』の記事を刻んであるといふのは、博麻顕彰の精神が『大日本史』の流れに沿うたものであることを語ってゐる。

元田永孚の『幼学綱要』（明治十五年刊）が、その「忠節第二」（第一章孝行第二章忠節の意味である）の冒頭に大伴部博麻をあげたのは、『大日本史』に準じたものにはちがひないが、久留米藩の建碑の事実によつて気づかされたのかも知れない。いづれにしろ明治時代になつて痛切に白村江の海戦が回顧されたとい

ふことは偶然のことではない。往時と明治との国民的緊張感にもとづく「感応相称」の精神の事実と見るべきである。

(七) 「白村江」の訓み方・補説

『日本書紀』に出てくる「白村江」を「ハクスキノエ」とも「ハクソンコウ」とも訓んでゐることは、既に拙著に述べたとほりである。

「ハクスキノエ」と訓むのは、『新日本紀』（卜部兼方著・鎌倉時代）に拠るのであらう。『新日本紀』（新訂増補・国史大系⁸）の巻廿「秘訓五」に、天智天皇紀の「待饗白村」（白村に待ち饗へむ）の「白村」について「ハクスキ」と振り仮名を付し、割註で次のやうに記してゐる。

私記曰。白字音読。村讀ニ須支一。

「私記」は「日本書紀私記」のことであるが、今日残つてゐる「私記」（国史大系⁸）の中には該当箇所

が見当らない。しかし、兼方が「私記」に拠つたことはまちがひあるまい。したがつて「ハクスキ」の訓は、奈良平安の頃から行なはれてゐたと思はれる。

「村」を「スキ」と訓むことについて、例証としてあげられる「意流村」（神功皇后紀）に「乎流乃須岐・豆流須岐」といふ訓みを加へてゐるのは、『日本書紀私記』（丙本）（新訂増補・国史大系⁸）であるし、『新日本紀』巻十七「秘訓三」に「オルノスキ」と振り仮名を付け「州流須祇」と註してある。したがつて「白村」の「村」を「スキ」と訓んでゐたのである。

『新日本紀』に「白村」の訓み方が出てくるすぐ前の箇所と同じ百済の「石城」といふ地名が出てくるが、それについては、「セキサシ」と振り仮名を付けて、やはり割註でかう書いてある。

私記曰。石字音讀。村讀ニ左之一。

「城」を「サシ」と訓むのは、朝鮮語の訓みであるから、「石城」も「白村」も『新日本紀』では同じ訓

み方をしたことになる。漢字地名を漢字音と朝鮮語訓とで訓んだのである。

『日本書紀』では、「待饗白村」のあとに「白村江」が出てくる。「陣烈於白村江」とあるのがこれである。この「白村江」については、『釈日本紀』には何も書いてない。今日残ってゐる『私記』にも相当する箇所は見当たらない。したがって、「白村」を「ハクスキ」と訓んだのは、『私記』『釈日本紀』の古代からと見られるが、「白村江」を「ハクスキノエ」と訓んだのは、何時のころとも定めることはできない。「白村」を「ハクスキ」と訓むのだから「白村江」は「ハクスキノエ」と訓むほかあるまいと言ってしまうとそれまでもだが、この「江」を「エ」と訓むことには、問題があるのである。

漢字の「江」は、揚子江の意味であるといふ。それほど、「大河」の意味が強いのである。ところが日本語の「江」（え）は、「入江」などといふやうに「湾」

の意味である。したがって、「ハクスキノエ」と訓めば、「ハクスキ」の入江といふ意味になる。この場合の「ハクスキ」は、川の名ととるのがよいか、海岸（湖岸）川岸などの地名にとるのがよいか、そこに問題がある。

同じ地点を中国側の『旧唐書』では「白江之口」と言っている。（『旧唐書』東夷伝・百濟）。『三国志記』の記事は、『旧唐書』に拠ったと思はれるが、「白江口」としてゐる（『三国志記』百濟本紀・義慈王二十年）。この場合の「白江」は河川の名前である。「白馬江」を「白江」と言ったので、今日の「錦江」のことをいふ。

しかし「白村江」の「江」を「え」と訓めば、この「江」を河川の名ととるのは無理だと思ふ。もしこの「江」を河川の名ととるなら「白村江」は「ハクソンコウ」または「ハクスキガハ」といふべきである。

『時代別・国語大辞典・上代編』で「江」（え）の

用例を調べてみると、次のやうな例がある。

日下延の入延、川俣延、奈呉の江、五十鈴河後之江、江林、入江、かはまた江、隠江、玉江、細江、堀江、小江

かういふ例を調べてみると、普通名詞はほとんどみな「入江」の意味で、その場所を呼ぶ場合は、地名の方から呼んでゐる。「五十鈴河」についても、「五十鈴河後之江」（かほじりのえ） Ⅱ 「河口の江」と言つて、「五十鈴の江」とか「五十鈴河の江」とは言はないのである。

さうすると、「ハクスキノエ」の「ハクスキ」は河の名ではなくて、入江そのものの地名といふことになる。

河の名前にすると、いづれにしろ白馬江・錦江のことであるから、「白村に待ち饗へむ」といふ豊彰王のことばは、少し無理なのである。「白江に行つて日本軍を待ちうけよう」といふのでは、漠然としすぎてゐる。もっと正確に地名を言ふべきところである。さう

すると、「白村」ハクスキは河川の名ではなく土地の名になるのではないかと思ふ。

『日本書紀』は七二〇年、『旧唐書』は九四五年、

『新唐書』は一〇六〇年、『資治通鑑』は一〇八四年、

『三国史記』は一一四五年の成立である。『三国史記』

は『旧唐書』その他中国文献を参照し、「百濟本紀」

などそれをそのまま採用してゐる箇所があるくらゐで

あるが、『日本書紀』を参照したとは見られてゐない。

さうすると、『三国史記』の「新羅本紀第七・文武王

二年」の条の「倭船千艘停つて白沙に在り」の「白沙」

は、「白村」と一致するが、これが『日本書紀』に拠

つたと考へられない以上、地名そのものの一致と考へ

るほかあるまい。(ただし、「倭船停在」は問題)

「白村」は「白沙」と同じになると考へると、「白

沙」を現在の「白沙里」とすれば大よその見当がつく。

「白沙里」は錦江右岸の入江で、いまも船つき場になつてゐる。

古代の名がわからないが、日本軍が錦江

に突入する直前に、この白沙で停泊することは充分想像できるから、「白沙」と「白村」とを、同一地点の日本の呼称と韓国側の呼称との相違とみて、不都合なことは出てこない。ただ問題は、『三國史記』の「白沙」を『日本書紀』にどうして「ハクスキ」と言ったのか、その問題が残るのである。

この辺のことは、軽部慈恩博士の『百濟遺跡の研究』に詳しいので、それ以上こまかなことを考へる必要もないかと思ふが、軽部説は、「白沙」「白村」「白馬」「熊津」みな韓国語音で、クマナルとなるとする。さうすると「白村」は白馬江の名前になる。「白村」を「ハクスキ」と訓んだのは、単なる訓み方だけの問題で、実際の地名とは関係が無いといふことになる。もしもそれだったら「白村江」は「ハクスキガハ」と訓まねばならなくなるだらう。この点について軽部博士は何も述べてをられない。

「白村」を「白沙」として、海戦の行なはれた錦江

河口を「白沙の江」とか「白村の江」とか呼ぶことについて、地理上の難点はない。それに、海戦は『日本書紀』に拠れば、戊申（二十七日）と己酉（二十八日）の両日にわたって戦はれてゐる。二十七日の海戦は

「白村江に陣烈（列）」した大唐の軍将率ゐるところの戦船一百七十艘と「日本の船師の初づ至る者」との海戦で、恐らくこれは日本水軍の先鋒と唐の水軍との遭遇戦であつたらう。そして、日本軍は不利で退き、唐は陣を堅めて守る、とあつて、日本の諸将と百済王（豊彰）とが戦略を相談した、とある。それが翌日のことであるから、ここで一旦、百済王と日本水軍の諸将とが連絡をとつたので、そこは主戦場たる白村江以外とすれば、説明がつくのである。日本軍を待ち迎へるために周留城から白江の河口にむかつた百済王が日本水軍と連絡をとらうとした地点は唐の水軍が封鎖してゐたのである。それは、錦江の河岸ではなく、河口の附近の海岸としなければならない。しかも、百済王

は唐の海軍の支配してゐる錦江を渡つてその南岸に出ることはできないから、「白村」は北岸でなければならぬ。しかも河口を遠くはなれた地点ではない。

以上のやうに考へれば「白村江の戦」を「ハクスキノエのタタカヒ」と訓んでもよいが、海戦の規模や意義からすると、地点を限定しすぎるきらひがある。またアジア史の中の大海戦としてはもっとひろがるのがある名で呼びたいと思ふ。さうすると漢籍の「白江」を生かして「白江の戦」または同じ意味で「白村江の戦」(ハクソンコウのタタカヒ)もすてがたいのである。

(4) あとがき

本稿作成について、中国史料の問題については亜細亜大学専任講師張祥義氏を煩はすこと多く、史料の利用についてはアジア研究所の司書五十嵐伸子さんたちにお世話になった。特に元馬山大学教授現亜細亜大学客員教授裴徳煥氏には『白村江の戦』の韓国関係の記

載事項について重要な御指摘をいただき、李弘植博士の韓国の『国史大事典』から引用・邦訳をしていただいた。記して謝意を表する。なほ拙著『白村江の戦』については、下島連教授の御批評をはじめ師友先輩をはじめとして多くの方々の心からなる御激励をいただき、かつ誤記誤植等について御叱正をいただいたことに対して、誌上をかりて深甚の謝意を申し上げたい。いづれ版を改める際には誤りのないものにして諸賢の御好意におむくいしたい。(昭和四十九年四月二日脱稿、五十年一月二十八日補筆)